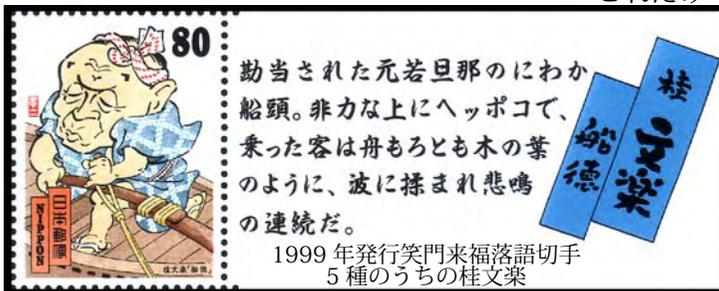


江戸を偲ぶ舟遊び

池山 眞彦
小川 義博

落語と時代小説に親しむ者にとって江戸の町の様子を思い浮かべることは楽しいときである。時に古地図を開き、志ん生の「黄金餅」の金兵衛が坊主西念を下谷山崎町から麻布まで担いだ道を辿ったり、鬼平はこのあたりを散歩したのかと思ひ巡らす岡の道は頭に浮かべ易い。しかし、勘当された若旦那船頭の徳さんが櫓を漕ぐ川面、剣豪坂崎磐音が佐々木道場から船に乗りこむ昌平橋あたりの川面のながめは頭に浮かびにくい。

に太田道灌が江戸城の鬼門除けとしてこの辺りに柳の木をたくさん植えた柳森神社を左手に、万世橋をすぎると右手に石丸電気、左手に上を中央線電車が走り、一部は交通博物館になっていたレンガ造りの外壁の旧万世橋駅が見えてくる。昌平橋にかかり、この辺りが坂崎磐音の生活の場で舟で両国、深川に出かけていたかと思っていると、ニコライ堂と湯島聖堂を結ぶから名前がついた聖橋が目の前に美しく見えてくる。この美しい橋をくぐると、世界の大都市でこれだけの緑の溪谷は見られないという緑の



中に入って行く。もしか、エディンバラの駅の谷が似ているか。日常は地下鉄で瞬間目にする風景をゆっくり堪能、この緑を育てているという行政サービスに感謝である。一方、左岸の崖が石垣であるのが残念、せめて常緑の蔦を植えて美しい溪谷にしてくれることを

機会があれば神田川を巡ってみたいと考えていた。この10月にやっとその機会に恵まれた。30年前から活動している「神田川船の会」が開く神田川巡りに参加する機会を稲フィラ会員2人は持つことが出来た。



御茶ノ水橋下よりの風景

両国の東京水辺ライン発着場から遊漁船5隻、屋形船1隻の船団で出港、綺麗どころは見えないが柳並木が両岸に見える柳橋をくぐると、いよいよ神田川である。

この神田川が1620年頃より掘削、造成された川であることは意外と知られていない。元の姿は後樂園近くから南へ流れ日比谷入江に注ぎ込む平川であったが、平川の氾濫を防ぐため本郷台地(神田台)を掘り割って通し、人工の谷である御茶ノ水を流れる神田川が作られた。



広重 名所江戸百景
昌平橋 聖堂 神田川
坂の上が現在の医科歯科大学か

柳橋を抜けるとビルの谷を遡り、室町時代



2007年発行
江戸名所と粋の浮世絵切手
水道橋駿河臺

JR東日本にお願いしたいところである。美しい緑を眺めているうちに神田上水の万年樋(懸樋)の跡を過ぎ、昔、尿尿を汚い船に積み替えていた跡が不燃物ごみを今も舁に積み替えているのに感動し、同時に防災船舶着場の存在とも考え、現在も重要な川の役割を考えながら水道橋を潜る。(災害時、ビルが崩壊し川を遮断し、緊急輸送路としての役割を果たせるか不安を感じる神田川であるが。)井之頭池を源に母校近

くを経て椿山荘下を流れてきた神田川を右に後楽園の小石川橋手前を左に日本橋川へと巡る。この日本橋川、神田三崎町辺りでお茶の水の



早稲田大学開校 20 周年当時の大学近くの神田川風景
新撰東京名所図會 陸書房より

掘削土で埋められていたものが明治 36 年に再び掘り戻されて川になったという。貨車の操車場跡を中心とした飯田橋周辺の再開発高層ビル群を左に、高速道路下を船団は低い橋の下を進み、火付盗賊改めの役所のあったという平河門近くの本田橋を鬼平を思いながら潜りつつ、共立女子大に切手研があったのを思い出していると、高速道路とのわずかな空間に日銀、三越本店が見え、すぐ、日本橋が迫ってくる。東京オリンピックのためとはいえ、この美しい橋の上に道路を作ってしまった素晴らしき決断に改めて脱帽である。そして、株屋街の茅場橋、右手に霊岸島をみると最後の橋、豊海橋を潜り、永代橋のすぐ下手の大川（隅田川）に戻る。（この間、満



2008年発行
八つ見のはし
鬼平の火付盗賊改方役所があり、何かと騒々しい所だつたらう現在の一石橋付近



1984年発行近代洋風建築
日本銀行本店



1964年発行 首都高速
道路開通記念

右 川面より見る日本橋の美しい姿。今にしては評価が分かれるが当時は切手を発行するまでの評価



木川、大川を少し下り清洲橋を過ぎ右手に見えてくる。この小名木川、下総の国、行徳から塩を江戸に安全に運ぶために掘られた運河である。この運河、運河というところすぐ思い出すパナマ運河と規模こそ違いますが同じ方式で船が通行できるロックゲート方式の運河であるというより、工業用水汲み上げが原因の地盤沈下によって、この方式を強いられた運河である。

入口の万年橋をすぎ、新小名木水門が見えてくる。「広重江戸百景 小奈木川五本まつ」に因んでか墨田区の木である黒松が綺麗に植えられている。この岸のカミソリ堤防といわれるコンクリートの堤防に驚く。大川のカミソリより、はるかに低いのである。ゼロメートル地帯に入ったのである。水門で水位を操作できなければ、大川の増水時には浸水被害が生じるという。更に進むと大きな水門が見えてくる。これがロックゲート、扇橋閘門である。わが6隻の船団は縦 120m、横 15 mのロック内に2列に待機、前扉が閉じられると徐々に水位が下がらだし、2.5m近く下がったところで後



2008年発行
江戸深川万年橋
欄干から見た大川を描く



今も黒松並木に偲ばれる
小奈(名)木川五本松

が完成し、大川(隅田川)と荒川が航行できるようになり、水辺の利便性が高まったという。

大川に出るとモダンな新大橋と江戸時代は両国広小路があり非常に賑やかであったという

両国橋をくぐり2時間半のクルージングは無事終了、夢に見る落語での猪牙舟で山谷堀から日本堤に上がり見返り柳を背に大門.....のコースは浮世絵の世界でイメージを膨らますしかないと自己に言い聞かす。緑のある河岸と高速道路の屋根のない区間が増えれば江戸のイメージももっと膨らませられたかと感じ

扉が開き、船団は水路を前進し小名木川橋手前でUターン。今度は、ロックに入ると渦を巻いて水が湧き出て2.5m上がって前門が開き、大川へむかう。ゼロメートル地帯の水位は大川よりこれだけ低いということ強く印象付けられた。この運河の荒川と接するところに3年前荒川ロックゲート



両国広小路の賑わいを思わせる
広重の両国橋大川ばた



上 ロック内に待機した船団
右 ロック内の水位表示
下 ロック式運河を描く1920年発行パナマ切手



ると同時に、新たな切り口で都市を考えるきっかけとなったクルージングであった。

ぐっとこらえてきた欲求を満たすべく、早々にコンクリート厠へと向かった。

このクルージング、年2回「神田川船の会」で行っています。また、JTBでも行っているとも聞きます。ぜひ、川面からの都心を散策されてはいかがでしょうか。

